

ふみの会 ニュース

■発行 　ふみの会広報部

■発行日 　2004年12月18日

■連絡先 　藤川博樹

〒115-0045

北区赤羽1-48-3ドミール藤203

tel03-5249-5797 fax03-3901-6090

■編集 　蒲原直樹 佐藤ユミ子

No.278

1月行事日程

■ ニュース編集兼新年会

原稿はテキストにして下記へ

ワード文書も可

kamo@sun.email.ne.jp

■ 1月22日(土) 4:30

四ツ谷地域センター 11F

地下鉄丸の内線 新宿御苑下車

四ツ谷方面へ徒歩5分



観光列車プチ・トランを眺める猫 ('02.8月ニューカレドニア)

◆二月二日、午後から横浜にいつてきた。かながわドームシアターは並んでいるひとたちがたくさんいて、熱心なファンがいるんだなあ、と感心。だれのおっかけなのだろうか……こちらは招待されていたので、あっけなく入場。YokohamaHOODI#4ファイナルは工夫された演出で客を飽きさせない展開だった。2時間を経て、ファイナル進出8組による歌のバトルは、だれもが認めざるをえない、という圧倒的な表現力の持ち主がグランプリを勝ち取る。若く、つややかな声の持ち主は神山幸也氏。音楽性の豊かさを感じさせる曲で他を圧倒した。近い将来の大成を思えば、若さって無条件でいいな、と認めなければならぬ。YAMAHのبوبコンでグランプリを制したグループは、なんとここでは落ちた。コンテストというものの絶対性が、かれらの演奏力から輝きを奪った瞬間をその場で目撃。きびしいもんだなあ、と思う。それにしても、いかに水準の高いコンテストだったかが判る。自分がセミファイナルへ行けたのは、何かのまちがいだっただのじゃないか、という気がしてしかなかった。

◆特異なミュージシャン田中太郎氏とは、会場で落ち合って客席で話をする。7年ほど前まではバンド活動をやっていたという。ボーカル担当だったのでギターは弾いたことがなく、ここ2、3年で弾き語り式のパフォーマンスをやるようになったとか。60年代の黒人音楽が大好きらしい。かれの奥さんもきていて、藤野土産の柚子やらカボスやらを渡せば、ひとしきりマーメイドの作り方なんかの話で盛り上がった。田中氏たちは早朝出勤とかでコンテストの結果をみずに帰ったけれど、今度は藤野であいましょう、とあいさつして別れた。かれらはわが家の子どもたち向けに人形を使った音楽ビデオを作ってくれていて、これは貴重な土産になった。(M)

新シリーズ

おれたちの村 ①

蒲原ユミ子

1 なんてこった始業式

陽平はちよつとどきどきしちやつてた。

あたらしい教室に、あたらしい先生と転入生までいる。2人とも女だけど、新しい顔はなんとなくいいもんだ。

きょうの空みたいな明るい青いワンピースを着た先生が、黒板に『桜田スミエ』と書いてからオレたちの方を見た。「大学を卒業したばかりで、まだほやほやの先生の卵です」

桜田先生は小さな声で自信なさそうに言った。「重まぶたの平凡な顔立ちと肩まで切りそろえた髪はまだ学生のように見える。けれど、陽平は気に入った。いばつていないところがいじやあないか。」

桜田先生は転入生の名前を、その子の名札をちらりと見てから、『森野泉』と書いた。その子は長い髪を後ろでポニー

テイルにして結び青いカチューシャで前髪もせんぶ上げているので、顔全体がもろ出してよく見える。はつきり言ってる美人ではない。1年生がむぞうきにかいた絵のようなおそまつな顔だ。桜田先生は緊張した作り笑いしてその子に聞いた。「自己しようかい、できる？」

その子はかしこそうにうなずいてからオレたちにしゃべった。「ぼくは森野泉といいます。横浜の小学校から来ました。よろしくおねがいします」

桜田先生よりはつきりしつかりした声だった。しかし、(まてよ)と陽平は思った。ボクだつて? 聞きがちがいかかな。桜田先生は質問した。

「ええと、泉さんの好きなものは何かな?」

先生はたしかに『泉さん』と言った。泉はちよつとうれしそうに笑った。左ほ

つぺたに片えくぼができ、ちよつとマシン顔になった。

「ぼくはドッジボールが大好きです」

陽平は混乱した。(やはり、この子は男の子かい?) 顔と声からではわからないが、そういえば、ズボンと上着はピंकなんかではない。陽平はまわりをうかがった。

全部で20人の3年生はかしこまつていて、陽平のようにきよろきよろしてやるヤツはいない。桜田先生と同じでみんな緊張しているのかもしれない。

桜田先生はろうか側の1番前の席に、泉を案内した。陽平はまん中の列の1番うしろなので、まあまあ観察しやすい。泉はそうとうくたびれた茶色のランドセルを下ろし、ふで箱なんかを机に入れた始めた。

黒板の前にもどつた桜田先生は出席簿を見ながら聞き取りにくい声で言った。

「じゃあ、みなさんの名前をよびますから、返事をしてくださいな」

「はい」

みんなの音がまだうすら寒い教室に今ひとつ元気なくひびいた。まだまだネコをかぶっているせいもある。桜田先生は立ったまま呼んだ。

「相沢圭子さん」

圭子はぎよつとし、ワテンポおくれで元気良く返事した。今までは4月生まれの男子、南葉ヒロキが最初だったから圭子は身長が一番高いし、運動神経もいい。

「北原陽平さん」

陽平はあわてた。2番目に呼ばれるなんて思っていなかったから。でも、少し、タイミングがずれた分思い切り声をはりあげた。

「はいいっ!」

桜田先生はびつくりしたように細い目を見開いたが、ちよつとうれしそうな

顔になった。陽平もほっとした。

全員の名前が呼ばれてからわかったことだけど、去年までの出席簿順とちがつて、男女混じった『あいうえお』じゅんだったのだ。桜田先生は説明しなかったけれど、みんなも質問しなかった。先生はなれていないのだから、つまらない質問なんかしてはかわいそうである。それに、名前の順番なんかどうってことない。すぐなれる。なにしろ、3年生はほんの20人、いや、「森野泉」が入って21人だもの。

それに、陽平の観察からすると、森野泉は男の子らしい。ランドセルやふで箱などの持ち物が女の子っぽくない。顔をまっすぐに上げ、しっかりと先生を見ながら話を聞いている。この教室で、先生よりも女の子のそれよりも髪が長いけれど、まあ男子の方がいっしょに遊べるからいいかと、陽平は思った。

しかし、それはあまかった。

教科書配りやそうじが終わったあと、しよざいなげにしているみんなに桜田先生がおずおずと提案した。

「きようはもうやることないから、ドッジボールでもしましょうか？」

「やったあ！」

やっとみんなの元気がもどった。陽平

は後ろのロッカーに入れてあるボールを取りに走った。新しいボールにマジックで黒々と『3年用』と書いてある。陽平はむんずとつかむと、2年生と1年生の教室前のろう下をドドッと走り、階段をかけ下り、体育館に向かった。やっと陽平の出番が来たのだ。

体育館は始業式が終わったあと、まだだれも使っていないかつたらしく、しんと明るく静まり返っている。『式次第』のプログラムが赤と白のお花紙でかざられたままだ。陽平はみんなが出てくるまでボールで壁打ちを始めた。

ドスツ

ドスツ！

じょうぶな体育館の木製の壁が力強くこたえる。

ドシツ！

陽平はゆかにバウンドする前にボールを取る。遠くに飛んだときには、かっこよく横つとびしてボールに飛びつき手におさめる。陽平はドッジボール少年なのだ。3年生になって体中の力がアップしたように感じる。陽平は体育館の壁に向かって自由自在に動く。陽平のウォーミングアップが終わったころ、みんなそろった。

桜田先生のまわりに、ちよつと打ちと

けてきた女子や男子がむらがつている。なんか若いお姉さんに甘えている年下の子どもたちのようにも見える。

「どういうふうに2組に分かれようか？」

と先生が言うと、しつかり者の圭子が、「去年の赤白でいいよね、みんな？」

何人かがうんうんとうなずくと、圭子はつづけた。

「転入生の泉くんが白で、先生が赤に入ったら人数は合うけど」

すかさず、「ずるい！」といったのは、けつこうドッジボールが強い白チームの南葉ヒロキ。赤チームの女子は、「いいよ」とうれしそう。桜田先生がもうし

わけなさそうに言った。

「わたし、ドッジボールはあまり強くないのよ」

へえくという男子の顔。圭子は取りし

まった。

「まず、やってみようよ。力のバランスが悪かったら、そのときトレードすればいいじゃない」

桜田先生はそうそうとうなずいた。みんなもなつとくした。陽平もオッケーだったので、ボールを先生にわたした。先生はセンターサークルに入って言った。

「じゃあ、センタージャンプからよ」

少し、先生らしくなってきた。自主的に

(つまり自信のある者だ) 赤は陽平、白は正夫がサークル内に立った。正夫は勉強も体育も良くできる。スキーでは、陽平はどうしても正夫に勝てないが、ずんぐりむつくりがっちり体型の陽平は、スリムな正夫よりパワーでは勝つてる。

闘志まんまんの陽平は桜田先生の投げたジャンプボールを思い切り飛び上がった味方に打ち込んだ。それを圭子が

取り、外野のメグミにパスした。メグミはボールを取りそこねた。でも、ころが

ったボールをいっしょうけんめい走ってひろい、白の内野にぶつけた。それは

気の毒なくらいの距離しか行かず、正夫にあつさりキャッチされた。正夫は逃げ

る赤チームのかたまりに投げつけた。ち

びの竜太があたり、ボールはそのまま外

野に転じた。それにとびつき、すばやく

また赤チームをねらったのは、元外野に

なっていた泉だった。そして、そのタマ

で女子ではナンバー1の圭子があつさり

り当てられてしまった。

「おおうー」
白チームがうなつた。それほど、泉の動きが野生のプーマのようにすばやく力強かった。(つづく)

ランデイス夫人

中井 豊

三重県の南に尾鷲という市がある。人口は少ないが、地域は広大で、降雨量が多いので有名な所だ。南東が海に面していて、北は山また山である。その中心に大台ヶ原という巨大な山があつて、深い原生林の中を「尾鷲道」という登山道が通じている。大台ヶ原は尾鷲市から見えない。

尾鷲へ引越したのは中学三年生の時だった。矢の川という地区に尾鷲中学校があつた。校舎が改築中で、古い木造の校舎の奥に新しい鉄筋コンクリートの校舎があつた。その真新しい校舎に入った。

中学校への通学路はダンブカーが行き交つて、雨になると泥濘に覆われ、歩きにくかった。海岸に中部電力の火力発電所が建設されていたのである。

前の学校と異なり、昼になるとどういふ訳か、脱脂粉乳でつくられた牛乳が毎日のように一人一本ずつ配られ、私達はそれを何も考えずに飲んだ。アメリカの脱脂粉乳を国が買わされていたのか。あるいは中部

電力から金が出ていたのかも知れない。

転校して間もなく、担任の先生の紹介で、五、六名の同級生と一緒にランデイス夫人のもとへ英会話の練習に行くようになった。私だけが男子で、他は女子ばかりだった。週に一回か、隔週に一回通つたように思う。ランデイス家はゆるやかな丘の中腹にあつて、私達は静かな田舎道を歩いて訪れた。

ランデイス夫人は六〇歳くらいに見える上品なアメリカ人で、火力発電所建設の仕事で来ていた技術者の夫と共に尾鷲市に暮らしておられた。家に茶色のアップライト・ピアノがあつた。夫人がアメリカ合衆国のどこからみえたのか聞いていた筈だが、憶えていない。外国の都市に何のイメージも抱くことが出来なかつたから無理はない。

確か夏休みの終わり頃、私一人で訪ねたことがある。和歌山県日高町にある父の生家へ行ってきた話などをした。おやつにトーストを焼い

てバターとイチゴジャムを塗って出してもらった。初めての食べ方だった。

年末に、クリスマス・プレゼントとして一人一人に赤い懐中電灯を下さつた。帰りの夜道は暗くなつてきていたので心配されたに違いない。

春が近づく時分、ランデイス夫人の娘さんが子供を連れて来られた。小学一年生くらいの小柄な男の子だった。どういふ訳か、この子を連れて尾鷲の町を歩いた。川のそばを歩いていて、小石を川に投げたので注意したらピタッと止めたので大いに感心した。残念ながら、日本の子供なら多少むくれたりする所だ。

私達が高校に入学してからランデイス夫人を訪れた記憶はない。帰国されたなら、お別れの行事があつた筈だが、それも思い出せない。心臓に持病があつたので、そのため英会話の相手が出来なくなつたのかも知れない。

一緒に通つていた坪田和歌子さんとは、この春に甲府で再会した。三五年振りになる。ご主人の今義博氏は哲学の先生で、とても優しい人だった。この夫婦はドイツで暮らしていたこともあるから、ドイツ語会話

もお手のものであるに違いない。その辺のことは美味しいお酒を頂戴しているうちに聞きそびれてしまった。

初めて片言の英語が通じた時の感動は、私の場合、ランデイス夫人が与えて下さつた。この「通じる！」という思いは、外国語を実際に口に出す時の不安に反比例する。どんなに外国語をコミュニケーションに使つてみようという意欲になる。この経験から、外国語を意志疎通の手段であると私も思えるようになったのである。



宇宙のささやき その3

高い峰々

藤川博樹

的にベートーヴェンとはそのように理解(誤解)されている存在なのである。それほどこの「ただただーん」は人々に知られよく引用される旋律である。

集まりのあとの飲み会か何かのとき、吉田さんが言ったこの言葉にひつかかるものがあって、長く忘れることができなかった。ちよつと馬鹿にしたニュアンスに反論したかったのだが、できなかった自分が不甲斐なかつた。ばつと言葉が出なかつた。考えがまとめられなかつた。それほど自分のなかでも深められていない考えを口に出す勇気が無かつた。しかし言いたい事はたくさんあつたという感じである。

あらためて考えてみると、ここにはこんなニュアンスが込められていた。つまり、ベートーヴェンの運命に代表されるクラシック音楽というのは、まじめで、威厳があつて大仰で、堅苦しくとつきにくい。我々庶民がたしなむものでもないというニュアンスである。そのニュアンスが「ただただーん」には込められていた。

いま、吉田さんの言葉を勝手にそのような推測したとして、吉田さんの言う事は確年ほど遅れてしまった反論を試みたい。一、「運命」は悪い曲ではない、立派な曲

だ

「運命」を初めて聞いたのは中学生のときだ。新宿のコタニで買ったドーナツ盤演奏はセルで、ポータブル電音である。電音というのはいまや骨董品だが、厚みのある弁当箱を一回り大きくしたようなもので、回転板にレコードを載せ、針を落とす。同じくセルの「新世界」とともに繰り返し聞いた。クラシック音楽の聞きはじめには誰でも聞くポピュラーな曲だが、後にほとんど聞く機会もなくなつてしまった曲である。

いま、改めてといった感じで聞き直してみると、その音楽の密度、構成の緊密さ、衝迫する力強さに驚く。偉大な音楽である。しかし、毎日繰り返し聴くような曲ではない。カンフル剤を打ちすぎると心臓が持たない。

二、ベートーベンの交響曲には運命以外にも良い曲がたくさんある

「運命」「田園」「合唱」といった曲が有名になりすぎてしまつて、何をいまさらといった感で、かえつてなかなか聞く機会がなくなつてしまつた。しかし、三番の「英雄」は交響曲の代表的傑作であると思つし好きな曲でもある。これら以外に、二番、四番、八番といった曲も素晴らしい。ペー

トーベンは奇数番号の曲がいいと言われるが、偶数番号の曲も捨てがたく好ましいものである。

三、ベートーヴェンにはたくさん峰々がある

やはり第九などの交響曲が有名であるが、ベートーベンは交響曲だけの作曲家ではないというのを身に沁みて感じるようになったのは最近である。交響曲以外にもピアノソナタ、ピアノ協奏曲、弦楽四重奏曲など、それぞれが巨大な峰である。つまり、ベートーベンは一曲だけそびえ立つ孤峰なのではなく、連峰なのである。それもヒマラヤのような一つ一つが八千メートル級の山々が連なる巨峰なのだ。

ピアノソナタも、「月光」「悲愴」「熱情」だけがすぐれているのではなく、もちろんこれらも素晴らしいが、「テンペスト」「ワルトシュタイン」「告别」などの愛称で呼ばれている曲もある。中でも晩年に近い作品の三十番、三十一番、三十二番のソナタが素晴らしい。ここまできるとベートーベンも融通無碍な高い境地を示していて、何か仏教的な瞑想さえ感じる。主題部、展開部というような構成からはじまるのではなく、何かが崩れ落ちるようにメロディーが流れたし、紡ぎだされ、ここまでき

何かの集まりの機会に、どういふ文脈だったかは忘れてしまつたが、吉田さんが「ただただーん、なんちゃってな」と言ったことがある。この「ただただーん」で模せられた旋律は、何を指しているか世の中のほとんどすべての人がわかる符号であつて、ベートーヴェンの「運命」という曲がいかにポピュラーに人々に知られているかを示している。

しかし、この「ただただーん」には少し馬鹿にした響きがあつて、多くの場合、に発せられる機会と同様この時の吉田さんの言葉にも、そのニュアンスを含んでいたように思う。悪意があるわけではなく、一般

もつながついていく。

ピアノ協奏曲では、四番がすごい。音楽は思想ではない、思想ではないが、何か人間が生きていく勇氣といったようなもの、向かい風に立ち向かっていく英雄的な勇氣といったものを感じさせる点において、ベートーベンの曲にあるものは言葉にならない。「思想」と呼んでいいものだと思う。一章の終わりに近い部分で、独奏者が即興演奏をし、妙技を披露する部分をカデンツァというが、モーツァルトやベートーベンと違って現代の演奏者は即興演奏ができないので、いや、できるかもしれないがやらないので、楽譜が用意されている。その部分は即興ではなく楽譜どおりである。いや、クラシック音楽はすべて楽譜どおりという言い方もできる。だがそこが大切な点である。楽譜どおりであって楽譜どおりでない、同じ演奏は一つもない。この曲では特にその点が強く感じさせられる。即興ではないが、何度聞いても音楽にいま創造されたばかりのような、はつとする輝きがあり、驚嘆させられる。

ふみの会ニュース (6)

アラウによってこの曲の素晴らしさを知り、他の演奏でも聞いてみたが、感銘はよみがえらなかった。奏者は亡くなったいるのだからCDで聞くしかないわけだが、

デジタル録音の音の再現性は素晴らしく、音楽を聴いていて鳥肌がたつという経験は少ない。

コラムその2

■役場の税務課の人間がふたり、とつぜんわが家を訪れた。なにごとか、と思つたら、健康保険税が未納だという。いや、口座から引き落とされてますよ、と応えて、通帳をみせる。ふたり、首をかき上げて帰つていったが、ほどなくして電話があり、残高不足で引き落とされていない分がある、というのであつた。どうやらそれは事実で、この年末にぎよつとする額の金が出ていくのを見送ることになった。それにしてもああして役人が未納の家庭を1軒1軒訪ねていかないと集まらないくらい保健税の滞納が増えているらしい。子どもたちもおおきくなり、近頃は風邪ひとつ引くでなし、元気に飛び回るようになると、わが健康一家は病院と縁が切れてしまっている。そうなるも現金なもので、月々の保健税負担はひどく過重なものに思えてくる。だいたい貧乏家族にとっては負担が高すぎた。

制度じたいはアメリカにもない社会主義的なもので、維持されなければならないのだが。■秋篠宮が皇太子夫婦の言動を公然と批判した。この裏には、ヨーロッパ型の「開かれた」王室を理想とする皇太子夫婦と、ナマズの研究なんかでよくいくタイなどのアジア型王室を理想とする秋篠宮の、皇室の有りに関する意見の違いがあるように思われる。我われ庶民にとつてはどっちもどっちだが、万世一系というクレジーなイデオロギー支配に郷愁を感じるひとたちにとっては、さぞや氣のもめる事態であろう。どうせなら皇位継承の問題もあるから、女帝を認めるとか何とかいうよりは神聖家族制度の縮小議論でも起こせばいいのに。憲法を改悪しよう、という勢力は国民主権の制限をどうしても実現したいから、天皇の元首化を計ろうとする。天皇制を政治的に利用しようとする支配層の思惑がこの先どこまでエスカレートするのか、時代の保守化を思うと気持ちが悪くなる。■国民を中央集権的に支配する「てこ」として推進されている自治体の合併だが、こゝ神奈川県は相模原市と津久井4町の合併問題は先行きが不透明になってきた。相模湖町の住民投票では単独町政維持派が勝つたからだ。ところが

この住民投票の結果を町長が無視しようとしている。明日、19日には抗議集会が開かれる。隣町で運動を起こしていた我われ「藤野町を愛する会」としては、地元では住民投票に負けたけれども、この抗議集会には連帯の意思を表明したい。具体的には集会へ参加して現時点で可能な運動のあり方を提起するつもりである。■病院とは縁が切れた、と書いたけれども、じつは先日、その病院のクリスマス、ミニコンサートに出演した。メインは横山茂さん。サポートのKYOUことピアノ奏者、室坂京子さん。わたしは前座で歌とギター演奏。珍しくオリジナルではなくて三橋美智也のナンバーをカバーしたが、お年寄りには好評で、主催者にもよるこんでもらえた。最近のわたしはオリジナルへのこだわりを捨てて、いろんな曲を演奏するようになって、リクエストの多い「朝日のあたる家」も覚え直した。ギターも変則チューニングからレギュラーへ戻っている。そうすると景色さえちがって見えるからふしぎだ。(K)

名前のない友人

内田幸彦

戦後、仕事の関係で知り合ったBさんは偶然、私と同じ一九二七年（昭和二）生まれだった。私が経営していた文化センターの講師で生け花の先生だった。

《うま》が合うというのか、仕事を離れて交際あうようになり、或る日、「一度お食事でも」と小料理屋へ足を運んだが、酔いが回ると気持ちが悪く、私事にまで話が及んだ。酒は急に親近感を増し、話を砕けさせる効果がある。

「今日は胸襟を開いて話ませんか。私は貴男に友人以上のものを感じております。一緒に仕事をし、こうして楽しく飲める。今日は嬉しいんです。聞いて下さい。女房にも話してない事なんです……。」

と彼はしんみりした表情で切り出した。「私の教えている生け花は、実は陸軍中野学校に関係があるのです。」

ふみの会ニュース (7)

日中戦争開戦後、参謀本部の「情報」を担当した中野学校の二部に、宣伝・謀略を担当する第八課が増設された。スパ

イの養成・謀略活動をした特殊部門である。（『戦争と平和辞典』より）

「中野学校といえは、スパイ活動の？」
「そうです。それが、一寸入り組んだ事情がありましてね……。まあいいか、貴男になら聞いて貰いましょう。」

ここでBさんは猪口を傾け、肚を据えた様子で続けた。
「この話には誰にも言わないで下さい。変わった生まれというか、数奇な人生というか、波乱万丈でしたよ、全く。実は私は皇族のMの宮の落とし胤なんです。母が御奉公に上がってお手が着いたという訳ですな。」

言われて見れば、ふつくらした丸顔に、細い優しい目、どことなく穏やかな気品が漂っている。

「十六の歳でしたが、突然、憲兵がやって来て、『事情は後で話すから、とにかく車に乗れ』と言うのです。何の事か判りませんが、行くしかありません。何とか着いた所が中野学校だったんです。」

「ほう、……。」

私は思わず彼の話を目を輝かせ、居住まいを正した。

「普通の学校と違って面白いんです、中野学校は。軍事教練の代わりにボーカーなどの賭博一切を習い、女の口説き方、目立たぬような金の使い方から変装の仕方まで。そりや、面白かったですよ。その反面、スリル満点というか、何時も危険と隣り合わせでしたよ。」

「戦時中は中支に渡り、軍票をバラ撒き、経済の攪乱ですね。中国の要人を色でたらし込み情報を得たり、中国人の苦力（クーリー）に化けて情報を探ったり、貴族や財界人に化け、社交界で遊んだり。そりや、スリルもあつて面白かった。」

「終戦後はどうなりました？」
「C級戦犯で収監されましたよ。突然、米軍のジープが拘置所まで迎えに来て、滋賀県の山中で解放されました。『身分を隠して自由に生きる。だが、過去の事は一切忘れる。誰にも話すな』と約束させられました。住んでいた世界が特殊なもので、急に娑婆に抛り出されて戸惑いました。兎に角、——寺男を振り出しにタクシーの運転手をしたり、おでん屋の屋台を曳っぱったり。一緒になった女がお

花の先生だったところから見よう見ま

ねでお花を習い免状も取りましたが、辛いことも多かった。——過去を隠して生きるというのもシンドイものです。籍も名も無いんですからね。今の家内にも過去は話してませんから知りませんよ。」と淋しく笑った。

彼は私と同じ歳であるのに、某名家の落とし胤という特異な出生のため、運命に弄ばれ、三転四転の人生を秘かに歩み続けて来た。世の中には色んな人生がある。私など平凡なサラリーマンの子に生まれ、不足にも思っていたが、彼に比べれば、むしろ幸福だったといえる。

十年前、彼は突然亡くなった。奥さんの話では心臓発作だったという。もともと小肥りだったから、矢張りの感がした。Bさんは誰も知らない人生を最後まで胸に生涯を閉じた。その鬱憤も晴らせず旅立った。せめてもう三年は生きていて欲しかった。

何時だったか、Bさん夫婦と私の三人で能登へ旅したことがある。白い波頭が逆巻く日本海を背に撮った三人の写真が手元にある。彼は無心に微笑んで写っている。死が間近だった事も知らずに。

ジャンクタウン戦記

終章

蒲原直樹

「ここでは話ができませんね」

ラーフラは反町をうながして『運命の館』の外に出た。彼女は通りをへだてた向かい側のレストランに入っていた。反町はその後を追った。彼らは窓側の席に陣取り、ラーフラはジャスミン茶を、反町は紅茶を注文した。

「お体の具合は、およろしいんですか？」

「ええ、まあ……」

女占い師は反町のだじった運命を熟知しているらしかった。

「どうやら、私たちは赤の他人同士ではないようです。少なくとも、あなたは私のことをすっかりご存知のようだ」

ラーフラは静かに笑った。

「反町さんがあの町でどんな目にあつたか、そして今、どんなことを知っていたかというだけじゃないのか、想像がつくというだけです」

反町は女の笑顔を見て瞬間的に悟った。この女はあの町にいたんだ、いや、それ以上だ、この女があつた町を作つたのだ、反町は確信的にそう思った。

「ゴミだらけで戦争状態だつたあの町、葛山

町とはいったい何だつたのですか？……あれは私の幻覚ですか？……と言ふより、あなたが作つた幻だつたのですか？」

女はゆつくりと懐からメンソール煙草を取り出した。そして、

「かまいませんか？」と聞いた。反町は答へた。その店は近頃めずらしい喫煙可能な店だつた。

「なにか話せばいいでしょうねえ……」

ラーフラは薄い煙をくゆらせながら目を細めて思索した。そしてまだ半分以上も残っている煙草を灰皿に押しつぶしながら話し始めた。

「私には娘がおりますのよ、それも反町さんと同じ、中学三年生でしてね……この子がゲーム好きで、オンラインゲームにはまっています。インターネットで大勢の人们が参加する、あれですね。……そのオンラインゲームに、私も引きずり込まれて、いつのまにかエスカレートしてしまつたので

す」

ラーフラは言葉を区切って反町の顔を見た。反町は黙つてうなずいた。

「オンラインでなく、オフで、現実世界でゲームしないか？誰かがそういう提案をしましたが、それに応えてシナリオを書いたのが娘です」それが『救済の女神ゲーム』です」

「そのゲームとは……」

「単純なロールプレイングで、悪のシンボルである塔を征服して閉じ込められている女神を助ける、というものです。娘は私にその女神になつてくれと言ってきました。そして『悪の塔』を作る方法も見つけてほしい、とも言いました。私はいついそれに乗つてしまつたのです」

「なるほど。……それであの『隕石』を使うことを考えたんですか？」

反町が合の手を入れるとラーフラはうなずいた。

「あれは隕石ではありません。反町さんは生物学にはお詳しいですか？……あれは生命体と非生命体との中間と思われている物質なん

です。死海やアラビア海にいる成長する球形物質の一種で、それを人工的に再現したまがいものです。ついでに色んな性質を付け加えたモンスターですね」

「それを誰が作つたのですか？……まさか、あなたではないでしょうね」

「私の夫です。筑波の航空宇宙研究所にいますが、生物学にも興味があるんです。あれは夫が冗談半分で作つてしまつたものなんです」

「すると、流星と思われたものは……」

「それも夫が作つたロケットです。と、言うよりも花火です。矢祭山の裏側から葛山湾を狙つて打ち上げました。さすがに専門家だけあつて見事に着地しましたね。」

反町は呆れるほかなかつた。

「なるほど、事前にモンスターを葛山湾に置いて、露石町長と志村漁業長に発見させたわけですね？」

「いいえ、ちがいます」ラーフラはニヤツとしました。

「あの人たちはそう思いこんでいるだけです。

実は、私が彼らに暗示をかけました。石は子どもたちが直接トラックで役場に持ち込みました。いっしょについて行った私が、役場の人たち全員に催眠術をかけたのです。ゲームのためですが……罪なことをしたものです」

反町はもう何も驚かなくなっていた。

「エネルギーセンターの製作は、あなたの指導のもとに行われたのですかね？……それも夫の方のアドバイスを受けながら」

「そうです。猫島建設というのは私の父の会社です。わがままは何でも聞いてくれました。おかげで想像以上のものが出来て、娘も私も大威張りでしたよ。でも、それがこちらの思惑を大きく外れていく原因にもなりました」

「……というところ……？」

「みんな、ゲームだということを忘れてしまったのです。現実エネルギーセンターが出来てしまうと、本当にあれが悪の巣窟だと信じこむ人たちがほとんどになってしまったんです。あとから参加してきた人たちだけでなく、最初から計画を進めてきたメンバーも『魔窟』を本気で恐れるようになってしまいました。……こんなことは私も想像できませんでした。罪の報いとしかしいようがありません」

「人が死ぬような事態になる前に、やめるべきではなかったのですか？……その前に、一つの町が破産したり、ゴミに埋もれたりした時点でやめるべきだったのでは……」

「もう無理でした」

ラーフラはさらに一本タバコを取り出そうとしてやめた。そしてジャスミン茶をすすった。

「私のかけた呪文だったのに、私にも解けなくなりました。エネルギーセンターも子どもたちも暴走し始めて、もう誰にも止められませんでした。私は黙って見ているしかなくなりました。あの塔の最上階で……」

ラーフラは遠くを見る目をし、反町はその視点の先を想像した。空しい夢があるだけだった。

春休みが終わって新学期が始まった。都内のとある女子高の校門から、始業式を終えた少女たちが笑いさざめきながら流れ出て来た。その中に背の高い、メガネをかけてマスクを付けた少女がいた。ダークブラウンの髪は後ろに巻き上げてある。彼女は周囲の女子生徒たちにはまったく関心がなさそうに、うつむいて一人で歩いていた。その少女の横にコートを着た中年の男が近寄ってきた。

「……カーリー」

呼ばれた少女は驚いて振り向いた。反町はちよつと照れくさそうに少女の瞳を見つめた。

「ケンジ、どうしてここが分かったの？」

少女はマスクを外した。

「君のお母さんから聞いたのさ。お姉さんじ

やなくて、お母さんのラーフラさんから」

「ああ……」

少女は形のよい唇を歪めた。

「あの人、自分のことを母さんって言われると怒って、姉さんって呼ばなきゃダメ、って言んだよ、とつくにオバサンなのに……金持ちの家のわがまま娘だからね、しょうがないよ、まったく……」

反町はその少女が実在していたことに驚くとともに、自分の罪の深さにおののいた。彼の声は震えていた。

「どうして黙って消えてしまったんだ？……電話くらい、いや、メールくらいくれればよかったのに！」

「……ごめん。あたしが悪かった」

少女はコクンと頭を下げた。二人は学校の隣りにあった公園のベンチに座った。

「でもね、ゲームが終わった時点であたしはもうカーリーじゃなくなつたんだ。カーリーの間はなんでも出来たけど、今のあたしは成績も悪い、特技もない、取り柄のない普通の子にもどつちやつたよ……」

「……」

「ゲームで『集結』したメンバーは、ゲームが『散開』したところでお互いに一切干渉しないことになってるの。救世教のメンバーも魔窟同ももう連絡を取り合ったりしないし、恨みっこなしになってるはずなんだ……」

「そうか……」

「でも、反町さんはゲームじゃないもんね。そのへんのケジメはあたしがつけるべきだったと思う。申し訳ない、あやまる」

「あやまるなよ、そんなつもりじゃないんだ……それにゲームを壊しちゃったのは、俺だろ？本気の軍人たちを導入してしまつたんだから……」

「たしかにそうだね。ラファエルの予言が本当になつちやつた。あんたが魔窟をぶつこわしたんだもん」

カーリーは初めて笑顔を見せた。

「武装ヘリと空挺隊が魔窟を攻撃しているのを見たときには、目が点になつたよ」

「名前が出たついでに教えてほしいんだけど、ラファエル、岡本麗子とは何者だったんだい？」

カーリーは少しの間言いよごんだ。

「あいつは地元の間人だよ。オンラインの間はわからなかつたけど、あの町の有力者の娘だったんだ。取り巻きが大きい、最初からあたしらとは違うセクトを作るつもりだったんだ」

「それが魔窟同だったんだね？」

「そう、ホントにたちの悪いゴロツキもだった」

「県警の石田警部との関係は？」

この質問はカマをかけるようなものだった。

警部とラファエルを繋ぐ線は何もなかった。「……よく知らないけど、母方の叔父さんだとか言ってたよ」

「そうか、なるほど……」

カーリーの答えに反町はほっとした。石田警部が辞任したのはそういう関係が明らかになるのを避けたのかもしれない、魔穢同の武装を見逃す一方で救女教をつぶしにかかったのにはそんな裏があったのだろう。

「ひとつの町をダメにして、大勢の人間を不幸にして、自分は何もなかったように普通の子に戻るなんて、胸が痛まないか？」

反町は自分の責めるような口調に自分で驚いた。

「……」

案の定カーリーは沈黙してしまった。

「……すまん、ゆるせ、言いすぎた」

反町は言いつくろったが、二人の間には冷たい空気が流れた。

「カーリーじゃない今は、透視能力もなくなったのか？」

反町はそんな空気に耐えられず、ぼそりとつぶやいた。少女は応えなかった。沈黙が続いたので反町は少女が肯定したものと考えた。「……その方がいい、あんなもの持ったらまともな人生は歩めないからな」

「また、あるよ！」

カーリーは突然、そう言って反町に抱きつ

いた。びつくりしてもがく反町の唇に少女の唇が重なった。少女の唇は懐かしい、甘ったるい味がした。その味をもっと味わおうと舌先を延ばした時、カーリーはバツと唇を離れた。

「……ずっと寂しかったんだね」

少女は言い、

「そうだよ、反町は素直に応えた。」

「心の中は寂しさでいっぱいだったよ、あたしが恋しくてたまらなかったつて。かくれんぼで忘れられて、野っぱらに取り残された子どもみたいだったつて……まったく、悲しい中年だねえ、ケンジは！」

「……めんぼくない」

「でもさ……」

カーリーは向こうを向いて立ち上がった。

「ケンジの寂しさつて、あたしじゃ埋められないやつだよ……」

少女は薄いカバンを揺らしながら物思いに沈む様子だった。

「女や家庭で埋められるものなら、とつくに埋まっているはずじゃない？ソウルに行つて親子水入らずで暮らせばいい。今は韓国ブームだから、通信の仕事だつていっぱいあるでしょ……でも、それが出来ない、それだけじゃないんだよ」

カーリーは反町の方に向き直った。

「もっと大きな……そうだ、世界の変革とか、

人類を救うとか、そんな大きな夢なんだよ。自分の仕事を通じて、それを実現したいという夢が、ケンジの中にまたあるんだ……でもそれが普通の、まともな生き方を邪魔しているのかもしれないね……」

彼女は独り言のように続けた。

「あたしや、ラファエルがケンジに感じた、なにか大きなものつて、それだったのかもしれない……あたしたちみたいに、超能力持っていないでも、実は目の前のものしか見えていないちっぽけな人間とは違うつていう、そんな大きさを感したんだ……」

なにを言っているんだろう、この娘は……

反町はそう思いながら、しかし次第に冷汗が流れて来た。

「週刊ディンゴの編集員だつていう三人がいたでしょ……あいつらはジャーナリストの亡霊なんだよ。ひたすらスキヤンダルを求めてさまよつてる……もともとは理想を持って報道の世界に入ったはずなのに、今はもう何の理想もない……そんなジャーナリズムの幽霊船みたいなのがあの連中だったよね。今はあんなやつらと縁が切れてよかった、と思つているんだよね？」

反町はしぶしぶうなづいた。

「葛山町で起きた戦争は、あたしたちが仕掛けたゲームだったけど、世界中で今も戦争は続いている。そのことをあたしは真剣に考え

たことはなかった……」

少女は反町の顔を覗き込んだ。

「ねえケンジ、あたしもその答えを探してほしいよ。そのためなら、もう一度カーリーになつてもいい」

「本当か？」

「本当さ……でも、恋愛じゃないよ、人類愛だよ」

「……」

人類愛でもいい、もう一度カーリーと愛し合いたい。反町はそれだけを考えていた。カーリーは手を振つて公園の出口を走つて行った。そして、

「忘れないでね、あたしはケンジの心の中を讀んだだけだよ」

と叫んだ。反町はドキツとした。

（心の中か……自分にもわからない、自分の心の中を覗かれるつてのはあんまり嬉しいもんじゃねえなあ……）

彼は立ち上がつて少し後悔し、そして駅の方へ歩き出した。たくさん女の子高校生たちが好奇心ありありに二人を見ていた。(完)